

第43回原子力委員会定例会議議事録（案）

- 1．日 時 2002年11月5日（火）10：30～11：20
- 2．場 所 中央合同庁舎第4号館7階 共用743会議室
- 3．出席者 藤家委員長、遠藤委員長代理、木元委員、竹内委員
玉野参与
内閣府
 榊原参事官（原子力担当）、後藤企画官
文部科学省
 原子力課 核融合開発室 大竹室長
- 4．議 題
（1）玉野参与の海外出張報告について
（2）第6回ITER政府間協議の結果について（文部科学省）
（3）第3回アジア原子力協力フォーラム（FNCA）大臣級会合の結果について
（4）その他
- 5．配布資料
資料1 玉野参与の海外出張報告について
資料2 第6回政府間協議について
資料3 第3回アジア原子力協力フォーラム（FNCA）大臣級会合開
催結果について
資料4 第42回原子力委員会定例会議議事録（案）

6 . 審議事項

(1) 玉野参与の海外出張報告について

標記の件について、玉野参与より資料 1 に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

(遠藤委員長代理) 米国の I T E R 計画への復帰については、どのような状況か。

(玉野参与) 本会議では、核融合実用化の加速計画について検討しており、米国の I T E R 以外の計画は I T E R よりも遅れるので、I T E R 計画に復帰することが必須の前提条件となっている。F E S A C (米国エネルギー省の核融合科学諮問協議会) は、今年 9 月 I T E R 計画に全面的に参加することを提案している。

(竹内委員) 最終的に決定するのは、大統領か。

(玉野参与) いろいろな噂が流れているが、本会議は、ハイレベルからの指示によるものと聞いている。F E S A C では、12 月 1 日までに報告書をまとめることになっている。もし核融合による発電の早期実用化は可能性が高いという報告になれば、I T E R 計画への復帰に向けて強い追い風となると思う。

(藤家委員長) 米国では、これまで何度も議論を繰り返してきたが、結局なかなか決まってきたおらず、ご指摘は少し楽観的な見方かもしれない。I T E R 計画に全面的に参加するということになれば、復帰する意味がないと思う。

資料中、C T F とは「総合的な」コンポーネント試験をする設備という意味なのか。

(玉野参与) 「Component Test Facility」の略称だが、モジュールの試験を行うのではなく、実機に近いもので試験を行うと聞いている。

(藤家委員長) 議論は、トカマク型に限っているのか。

(玉野参与) トカマク型が実用化に最も近いものなので、それが議論の中心となっている。ヨーロッパでは、ステラレーター (ヘリカル型) も検討を進めているが、それでもトカマク型の最も早い加速案から比べると 10 年程度遅れている。

I T E R 計画へ全面的に復帰することについては、F E S A C の全員が賛成している。

(藤家委員長) 慣性核融合についても議論している理由は何か。

(玉野参与) 米国では、慣性核融合の研究も並行して進めているので、どのような道筋で進めていくのかについてなど同時に検討されている。

(藤家委員長) 我が国では、核融合の研究開発について広がりを持った検討を行い、最終的には I T E R 計画へ集約させた。米国では、集約へ向けた議論がされているのかどうか。

(玉野参与) 慣性核融合についても検討しているのは、上からの指示によるもので、本会議の判断で議論に取り入れたわけではないようである。

(藤家委員長) 出席者のリストがあれば、後でいただきたい。

(木元委員) 専門的なことは、メディアに取り上げられにくい。この会議では、メディアはどのような反応だったのか。

(玉野参与) 本会議は、オープンなものでなかったと思う。11月に米国の物理学会で公に会合を開き、いろいろな方々の意見を聞く機会を設ける予定と聞いている。

(木元委員) なんらかの世論のバックアップがないと、やりにくいことがあるのではないか。

(藤家委員長) I T E R の安全性については、D O E (米国エネルギー省) が見ることになるのか。

(玉野参与) 5年以上前から、D O E が中心となって核融合の安全について検討している。米国は、日本とは異なり、先にどのようなことが可能かどうかを検討するところがある。

(2) 第 6 回 I T E R 政府間協議の結果について (文部科学省)

標記の件について、大竹室長より資料 2 に基づき説明があり、以下のとおり質疑応答があった。

(遠藤委員長代理) サイト選定に向けた検討は、順調に進んでいるのか。

(大竹室長) 技術的な評価は、当初の予定どおりに進んでいる。決定がいつになるのかについては、政府間協議の進捗を見ながら決まることになると思う。

(3) 第 3 回アジア原子力協力フォーラム (FNCA) 大臣級会合の結果について

標記の件について、榊原参事官より資料 3 に基づき説明があり、以下のとおり意見交換があった。

(遠藤委員長代理) 今回の F N C A には 9 カ国が参加したが、各国の考えは多様であった。例えば、エネルギーとしての原子力の位置付けについては、原子力発電を既に実施している中国や韓国、これから導入しようとしているヴェトナムやインドネシアは肯定的だったが、導入を全く考えていないマレーシアやタイは否定的だった。さらに、原子力を C D M (クリーン開発メカニズム) の対象とするかどうかについては、このような各国の考えの違いが顕著に現れた。C D M については、第 2 約束期間までに、よりポジティブな形で原子力を取り込むことができるように努力したいと考えている。

第 2 に、人材育成については、今後はより具体的に進めていく必要があると思う。

第 3 に、北朝鮮の核開発については、各国の態度には微妙な違いがあるが、最終的には議長サマリーに取り入れることができた。

(竹内委員) 人材についてだが、参加各国は、原子力に関して、どのような人材がどのくらい必要なのか、どのような仕事にどのくらい需要があるのか承知していないところもあり、今後、具体的なデータを示していくことも必要だと思う。

(藤家委員長) 今回で 3 回目であり、回が進むごとに前進していると思う。継続することが最も重要である。特に、今回は日韓共催だったので、北朝鮮の核開発について取り上げることができたことは、1 つの大きな成果だった。来年の開催地は日本だが、たくさんの国が再来年の開催地に立候補しており、うれしいことである。

(木元委員) C D M については、グローバルに浸透してきていると思う。原子力を C D M の対象とすることに否定的な国は、原子力の何を問題としているとお考えなのか。

(遠藤委員長代理) 否定的な国はマレーシアやタイだが、原子力は安全性が確立されていないこと、放射性廃棄物の問題があることを理由に挙げている。2005 年から第 2 約束期間の審議が始まるが、そこでは、原子力を対象とすることができるように連携をとって対応したい。

(藤家委員長) まだ、そのような状況に至っていない、というのが最大の理由だと思う。だからこそ、継続していくことが重要である。

(木元委員) いろいろな思惑が絡んでいて、理解していても、この場では論じることができない、というところがあるのかもしれない。

(藤家委員長) F N C A の出席者では政治的な態度を明確にできなかったと

ころがある。

(木元委員) 議長サマリーには、どのように書かれているのか。

(遠藤委員長代理) 議長サマリーには、「北朝鮮の核開発計画に対し懸念を表明、平和的でかつ速やかな解決を強く希望」と書いてある。

(木元委員) F N C Aとして「絶対に止めさせよう」というような決意の表明にはなっていないのは残念である。このような表明にすることはできなかったということか。

(遠藤委員長代理) そのとおりである。ある国からは、「F N C Aは技術的な点を議論する場ではないか」というご意見があったが、私は「そのとおりだが、その議論の背景にあるのは平和利用である。今、これが脅かされている」と答えた。

(藤家委員長) この問題については、かなりクローズアップして議論したが、サポートしてくれる意見が多かった。

(木元委員) この問題に対する危機感について、F N C Aから大きな声をあげることができれば、最も望ましいと思う。なかなか難しいことだが、F N C Aそのものが、大きくステップ・アップしてほしい。

(藤家委員長) 今回の会議では、議長サマリーに書き込めるかどうか最大争点だった。この点については、日韓共催ということで、成果をあげられたと思う。

(4) その他

- ・事務局作成の資料4の第42回原子力委員会定例会議議事録(案)が了承された。
- ・事務局より、11月12日(火)に次回定例会議が開催される旨、発言があった。